

OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

大津 歴博 だより

企画展

2003
No.52

比叡山麓の仏像

10月4日(土)～11月16日(日)



重要文化財 木造薬師如来坐像 一軀 鎌倉時代 西教寺蔵



大津市歴史博物館

企画展

「比叡山麓の仏像」

比叡山延暦寺は、伝教大師最澄による開山以来、日本仏教の中心地としての歴史を刻んできました。その歴史の中で山内ならびにその山麓には多くの寺院が建立され、多数の仏教美術が造られています。当館では、開館以来、比叡山上の諸堂をはじめ、坂本里坊や葛川などを中心とした比叡山麓の延暦寺関連寺院、及び、市内の天台系寺院の調査を実施してきました。

本展では、これらの調査で見出された尊像の数々を、今まで知られてきた名品とともに展示し、比叡山の山上と山麓という、双方を見つめることで、日本仏教の中心地でありながらも、謎の多い比叡山の仏教文化を概観するものです。

1 坂本里坊伝来の仏像

延暦寺僧が住する里坊には、今なお多くの仏像が伝来しています。本来は山上や近隣の関係寺院から移してきたものと想像されますが、比叡山伝来の仏像であることに変わりありません。今回は約二〇件の仏像を展示し、山上とは違うもう一つの「延暦寺の仏像」を紹介します。



木造不動明王坐像 山内寺院 平安時代



木造如意輪観音坐像 理性院 鎌倉時代

※里坊・延暦寺関係寺院名は所蔵者の意向により「山内寺院」と標記している場合があります。

2 比叡山麓の諸寺院に伝来した仏像

比叡山麓には、延暦寺に関係の深い天台寺院が多数建立され、「山」を取り巻く形で天台王国が作られてきました。現在も、西教寺や聖衆来迎寺



木造阿弥陀如来立像 山内寺院 鎌倉時代



木造不動明王立像 山内寺院 鎌倉時代

行丸と日吉社復興

■ 10月15日(水)～11月24日(振替休日)

元龜二年(一五七二)、織田信長の山門焼き討ちによって、日吉社の社殿もすべて焼失しましたが、関係者の努力により、時を経ずして復興の槌音が響き始めます。この復興を担った中心人物が、祝部行丸(一五二一～一五九二)でした。行丸が山門焼き討ちに遭遇したのは、六〇歳の時。社殿を守っていた行丸達は、内陣深くまで乱入してきた兵により、社外へ放り出され、身一つで伊香立に逃れたといいます。

彼が再び社頭の地を踏むのは天正三年(一五七五)、その荒れ果てた姿を眼前にして、復興への意を強くしたと伝えられています。行丸は復興のため各方面に働きかけるとともに、その典拠となる記録類も整備しました。

本展では、日吉社復興を担った行丸の著作等により、その業績の一端を紹介します。



【行丸絵図】(部分) 日吉大社 江戸時代

近江の藩窯から―膳所焼と湖東焼―

■ 11月26日(水)～12月26日(金)

重厚な趣きをもつ茶器が有名な膳所焼と、金蘭手や錦手の華やかで精緻な作風でよく知られる湖東焼。今回の「三」企画展では、江戸時代の近江を代表する二つのやきものを館藏品から紹介します。

写真は「膳所一重口水指」です。慶長年間(一五九六～一六一五)頃には焼き始められていたとされる膳所焼は、膳所藩の保護を受け、近隣の京などの茶人の好みを反映した茶器が作られていました。この作品の一重の口造りから円筒形の胴下半へかけて施された釉の飴色などにその特徴をみることができま。こうした作品が作られていたのは、記録上、

寛永年間(一六二四～一四四)から寛文年間(一六六一～一七三)頃のことと考えられています。



膳所一重口水指 館蔵 江戸時代

をはじめ、坂本、仰木、大原、八瀬等には多くの文化財が現存し、優れた仏教美術を蔵しています。それらの中にはもともと比叡山上にあったものが現在山麓におろされているものもあります。これらの仏像は、失われてしまった延暦寺の原像を探る上で重要なのです。

重要文化財 木造聖観音立像 西教寺 平安時代



木造千手観音坐像 山内寺院 平安時代



重要文化財 木造十一面観音立像 盛安寺 平安時代



3 比叡山上传来の仏像—三塔十六谷二別所—

比叡山延暦寺には、諸堂の仏像安置状況を記す史料が多く伝わっていますが、現存の仏像で、それらの記録と比定できる仏像は、今のところ確認されていません。しかし、それでもなお、諸堂には夥しい数の仏像が現在も安置され、秀麗な姿を伝えています。ここでは既知の名品と、今回の調査で新たに確認できた諸像を展示します。

重要文化財 木造千手観音立像 延暦寺 平安時代



木造四天王立像(多聞天) 延暦寺 平安時代



★その他の主な出品作品(◎は重要文化財)

- ◎木造不動明王坐像 大林院 平安時代
- ◎木造不動明王二童子立像 玉蓮院 鎌倉時代
- ◎木造聖観音坐像 満月寺(浮御堂) 平安時代
- ◎木造薬師如来坐像 専念寺 平安時代
- ◎木造千手観音 不動明王 毘沙門天立像 明王院 平安時代

◎木造十一面観音立像 八瀬文化財保存会

平安時代

◎木造地藏菩薩半跏像 真光寺 鎌倉時代ほか

★休館日 一〇月六日・一四日・二〇日・二七日、

十一月四日・一日

★観覧料 一般六〇〇円、高大生五〇〇円、

小中生四〇〇円。

前売り券、一五名以上の団体、市内在住の六五歳以上の方・障害者の方は割引料金(二割引)

大津の仏教文化4

密教図像

■平成16年1月6日(火)～2月15日(日)

大津の仏教文化を紹介するシリーズの第四弾。今回は、密教尊像の容を伝え、それらを造像するのに重要な「密教図像」を紹介しします。大津は台密(天台密教)、東密(真言密教)の中心地の一つとして、様々な密教図像が伝来しています。この密教図像は平安時代に、特に東密を中心に発達しました。市内の石山寺にはこの時代のものが多数伝来しています。一方の台密の図像編さんはやや遅れ、鎌倉時代中ごろから始まります。それが「阿婆縛抄」です。原本は失われましたが、その写本が延暦寺や西教寺等に多数残されています。

今回の展示では、それら東密と台密の密教図像を展示し、密教美術の一面を紹介するとともに、その図像の集大成である両界曼荼羅図(金剛界八十一尊曼荼羅・台密系 本館所蔵)をあわせて展示する予定です。



両界曼荼羅図 2幅のうち胎藏界(部分)

「近江・大津になぜ都は営まれたのか」

—大津宮・紫香楽宮・保良宮—

最近、大津市・滋賀県では、聖武天皇の禾津頓宮跡と推定される遺跡や、紫香楽宮の宮殿や鑄銅遺構など、古代近江の宮都に関連した重要な発掘成果が相次いでいます。本シンポジウムは、従来の研究の蓄積に、これら最新の成果を加えて、古代の近江・大津に、大津宮・紫香楽宮・保良宮など、日本の首都が置かれた理由を解き明かそうとするものです。

【日時】一月二日(出)午前10時30分～午後四時30分

【場所】大津市生涯学習センター(大津市本丸町六―五〇)

【日程・講師】

発掘事例報告(午前10時30分～11時)

滋賀県文化財保護協会技師

信楽町教育委員会文化財調査室技師

大津市教育委員会文化財保護課技師

基調講演・討論(午後1時30分～午後四時30分)

井上 満郎(京都産業大学文化学部教授)

榮原永遠男(大阪市立大学大学院教授・

紫香楽宮跡調査副委員長)

林 博通(滋賀県立大学人間文化学部教授)

金田 章裕(京都大学副学長)

【参加料】五〇〇円(資料代を含む)

※お申込みは、歴史博物館へ。(〆切二月八日)

大津市中庄の上田次栄さんより、次栄さんの義父上田長次郎氏が上等兵（戦時中に伍長・軍曹と昇進）として従軍した日露戦争の日記や戦地からの手紙などを一括、当歴史博物館に寄贈するとの申出をいただいた。このほど日記等の全文翻刻に目途がたつたので、簡単に内容を紹介する。

「従軍日記」（表紙縦二四cm、横一六・八cm）は、復員後、戦地でのメモを参考に清書したものを（野紙七二枚）。また戦地からの手紙や絵葉書は、長次郎氏の奥様綾野さんが長く保管していたものを、昭和五二年、綾野さん自身が大学ノートに丁寧に貼り付けられている。絵葉書には、内地の小學生児童たちが慰問として描いたものが二枚含まれ、また戦地からの手紙などには「征露第二年」と記されたものもみられる。次に日記から少し抜粋してみよう。

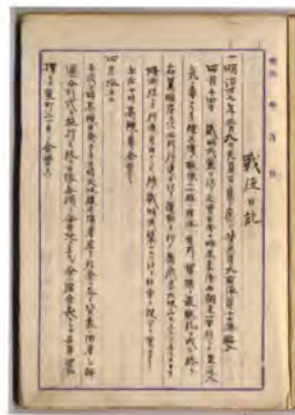
上田上等兵は、戦地で病氣となり、現地の住人の家に招かれる。住人は「非常ニ心切ニシテ庭ハ衛生上宜シカラズト一室ヲ貸シ与ヘタリ、余ハ厚意ヲ受ケ寝ルコトニ決心セリ」、しかし油断がならないので、「先ツ銃ニ弾丸ヲツメ、劍ヲ附ケ枕元ニ置き寝ニ付ケリ」と、戦地での緊迫した状況を綴っている。またロシア人の負傷者を見て、彼

は心を幾度となく動かされる。「敵は」死体ヲ輪掃スル得ズシテ、捨置ケル死体沢山アリテ、今ハ全ク骨計リト成リ、肉ハ犬ノ食ヒ尽ス所トナリ、敗戦ノ情氣ノ毒ノ感ニウタル」、また「夜間敵ノ負傷者、助ヲ求ムルウナリ声ハケ間敷、敵ト云ヘ個人ニ至リテハ敵ナク憐ナリ」と、悲惨な最前線にあつて、なおかつ敵を同情する人間らしさを保っているのである。一方、零下二〇度という極寒のなか、「金属部ニハ手ヲフル得ズ、忽チ付着シテ皮ヲハガレ出血ス、家屋内ニテ手紙等ヲ認メントスレバ三字ヨリ続テ書ク得ハズ」などと、その極限のありさまを記述している。

日露戦争の従軍日記は、滋賀県内でも草津・栗東・八日市の各市で見つかつており、県外でも出版されたものが数冊存在している。上田氏は、第二軍として満州に従軍しているのだが、このような日記や手紙類を地道に翻刻、紹介していくことが、日露戦争の全貌や真実に迫る唯一の方法と考えられる。日本にとつても「戦争」が身近に感じられる昨今、このような作業も一定の意義を持つかと考え、今回紹介した次第である。なお引用した日記の文字使いは原文のままである。

（樋爪 修）

従軍日記



戦地からの絵葉書



大津歴博だより No.52
平成15年9月20日

大津市歴史博物館
〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>